

令和 4 年 6 月 12 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03092

研究課題名(和文)近世百姓印の生産・流通に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic research on the production and distribution of peasant seals in the early modern period

研究代表者

千葉 真由美(CHIBA, Mayumi)

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：50396933

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文):本研究は一般の民衆が広く印を所持するようになった近世の印を対象として、その生産・流通の様相を把握することを目的とした。各地域における史料調査を通じて、江戸・大坂・京都の印判師の存在が確認できるデータを蓄積することができた。そして印判師によって製作された印の流通については、およそその把握が可能となった。また、江戸・大坂・京都、各印判師の活動や印の流通については、地域の特徴を考察することもできると考える。今後のさらなる検討によって、近世の民衆が必要とする「モノ」の動きに着目した近世社会の特質を追究することが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般の民衆が広く印を所持するようになった近世の印については、研究上で意識はされつつ、また個別事例での考察はされているものの、継続的な検討が深まっていない状況であった。また印が誰によって製作されたものか、どのように流通していたのかについては、ほとんど論じられてこなかった。本研究では江戸・大坂・京都の印判師の存在に着目し、彼らが製作した印とその流通を把握できる史料を蓄積し、それぞれの地域における特質を検討することができた。百姓印のように民衆世界の中で共通に所有している「モノ」の流通を明らかにすることで、今後、生産・流通・消費の様相を総合的に検討する土台ができたと考えられる。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study was to understand the production and distribution of seals in the early modern period, when seals became widely owned by the general public. Through the survey of historical documents in each region, we were able to accumulate data that confirmed the existence of seal makers in Edo, Osaka, and Kyoto. We were also able to obtain a rough understanding of the distribution of seals produced by seal makers. We also believe that the activities and distribution of seals produced by seal makers in Edo, Osaka, and Kyoto can be examined in terms of their regional characteristics. Further study will enable us to pursue the characteristics of early modern society, focusing on the movement of "goods" needed by the people in the early modern period.

研究分野：日本近世史

キーワード：百姓印 印判師 近世 生産・流通 村落 都市

1. 研究開始当初の背景

一般民衆が印を所持し、文書に押印するようになったのは、近世、江戸時代からである。百姓が使用する印(以下「百姓印」とする)の重要性については、研究上で意識はされつつ、また個別事例での考察はされているものの、継続的な検討が深まっていない状況である。報告者は南関東の村を事例として、印の使用状況、百姓の意思表示の道具としての役割、村運営における意味等、村社会における歴史的意義等、総合的に検討を進めてきた。また特に百姓が使用した印が誰によって製作されたものか、どのように流通していたのかについては、ほとんど論じられてこなかった。そこで報告者は、江戸の印判師が製作した印を、江戸からは遠方ともいえる地域の村の百姓、例えば常陸国(現茨城県)北部の村の百姓が使用する事例を提示した。水戸藩など大名の統治拠点たる城下町の職人ではなく、江戸の印判師から印を購入していた様相がわかるものであるが、一方で全国的に各城下町に印判師がいたのかも含め、印判師の活動等については明らかにはなっていない。

膨大な研究成果のある村落史研究の中で、印をめぐる研究は蓄積が不十分な分野である。しかし「文書社会」とも呼ばれる近世では、百姓が文書において個々の意思を示す唯一の箇所が押印ともいえる。印自体にも、個々の思いが込められていたと想定され、百姓一人ひとりの姿が見えにくい時代の研究としても、重要な課題と考える。

また印のように、民衆世界の中で共通に所有している「モノ」の流通について明らかにすることは、近年、注目される生産・流通・消費の様相を一体と検討する研究動向にも合致する。本研究での分析を通して、日本社会の特質を追究していくことができると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、現代日本社会に根づく押印の習慣や制度の源流を明らかにし、一般民衆による印(印章)の所持および押印をめぐる、日本社会史上の歴史的意味を追究することを目的とする。一般の民衆が広く印を所持するようになった近世、特に江戸時代の印を対象として、印の生産・流通の様相を明らかにする。具体的には、以下の点についての検討を目的とした。

(1) 印判師の存在形態

江戸時代の三都(江戸・大坂・京都)における印判師の存在、活動の様相を明らかにする。近世に刊行された諸国の案内記などには、江戸・大坂・京都の「三都」の印判師の名前や所在地が掲載され、その存在は確認できるものの、詳細については不明な点が多い。まずは三都の印判師の存在を確認し、さらに三都以外の城下町などにおける印判師の存在を検討する。

(2) 印判師が製作した印の流通状況

各地の文書に押された印に着目すると、全国的に印の形態が同様のものになっていくことが指摘できる。そこでまず、三都の印判師が製作した印はどの地域まで流通していたのかを明らかにし、合わせて近世社会における印製作の技術の伝播についても検討する。

(3) 近世の民衆が必要とする「モノ」の動き、その社会的背景の把握

印の生産や流通を明らかにすることで、印に限られた問題ではなく、近世の民衆が必要とする商品全体の流通、「モノ」の動きを捉えることが可能となり、近世社会全体の特質について考察するための重要な要素となり得る。

上記の点をふまえた分析を通して、印判師と百姓が使用する印の関係について、個別事例にとどめるのではなく、日本社会に根づく押印についての歴史的経緯や意味付けなどの特質を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 関東地域における悉皆調査とデータ集積

まず関東地域を対象として、江戸の印判師が製作した印の流通状況を明らかにする。各自治体の公文書館等の史料検索データベースや冊子体の刊行目録を調査し、網羅的にデータの集積を行う。古文書調査実施機関は、千葉県文書館、栃木県文書館、群馬県立文書館、神奈川県立公文書館などである。さらに関東にとどまらない地域の史料も対象に江戸の印判師を確認する。古文書調査実施機関は、国文学研究資料館、岐阜県歴史資料館、愛知県公文書館、新潟県立文書館、長野県立歴史館などである。

(2) 大坂・京都の印判師に関する悉皆調査とデータ集積

江戸の印判師の場合と同様に網羅的にデータの集積を行う。古文書調査機関は、京都府立京都市・歴史館、大阪府公文書館、大阪府立中之島図書館、奈良県立図書情報館、金沢市立玉川図書館、富山県公文書館、三重県総合博物館などである。

(3) その他の地域における印判師の調査

三都からは遠隔地域ともいえる東北・四国・九州などを対象にデータ集積と調査を行い、さまざまな職人が居住する城下町での印判師の存在を確認する。古文書調査機関は、秋田県公文書館、山口県文書館、徳島県立文書館、香川県立文書館、香川大学図書館、九州歴史資料館、柳川古文書館、長崎歴史文化博物館などである。

さらに村社会のみではなく、支配側の印の使用についても視野に入れることとし、公益財団法人江川文庫での史料調査を実施する。

(4) 印製作関係者等への聞き取り調査

現在の印章業関係者等への聞き取り調査を行い、印判師についての史料の所在や伝承等について確認する。

(5) 研究成果の公開

論文作成や口頭発表などによって、研究成果を公開する。

4. 研究成果

(1) 印判師関係史料の集積

江戸の印判師を対象に、関東地域の史料所蔵機関を中心とした古文書調査によって、複数の江戸の印判師の存在を確認することができた。また関東にとどまらない地域の村の百姓が江戸の印判師から印を購入している事例もあり、印の流通状況について、一定のデータを集積することができた。特に関東以外では信濃国、美濃国、加賀国の人々が江戸の印判師とつながりを持っていることを確認している。いくつかの村の事例からは、名主などで在郷商人としての活動も行う経済力のある百姓が、江戸の商人らと取引をするなど、江戸の一定のつながりを持つ存在であることも想定できる。

大坂・京都の印判師についても、畿内を中心とした史料所蔵機関の古文書調査によって、複数の印判師の存在を確認することができ、印の流通状況についても一定のデータを集積することができた。このうち大坂の印判師細字重三郎に関する史料として、刊本『実印之穿鑿』の所在やその内容を確認、比較検討すると共に、同様に板木師を兼ねる印判師によって製作された刷り物についても、合わせてデータを集積した。特に大坂の印判師は、自らの活動についての宣伝広告を積極的に行っているような事例も確認できており、江戸の印判師とは異なる特質も想定される。さらに四国に所在する史料からは、大坂とのつながりを想起できる内容も確認できたことで、当該地域を経済圏との関連で注目できるものとなった。

(2) 旧家等への聞き取り調査

近世の印判師の系譜を有する旧家の聞き取り調査を金沢および京都にて実施し、現在に至る伝承や印判製作の様子等について、また印の製作にとどまらない印判師の活動についても新たな知見を得ることができた。印判師の活動については引き続き、聞き取りや関係史料を集積する予定である。一方で、近世の印判師について考察が可能となる直接の史料については、現状ではほとんど残っていないと考えられていることから、さらに引き続いての調査等を進める必要があることがわかった。

(3) 成果の公表

集積した史料を分析し、江戸の印判師のうち特に下総国および常陸国の人々が使用する印を製作した印判師森田與七と金子井兵衛、また明治期の印判職の存在について、史料紹介を含めた論考を公表することができた。また、印が日本史上において果たしてきた役割について、特に近世の百姓が印および押印をどのように扱い意識していたのか、印についての規定や印判師の活動などを通して、近世社会における印の特質、印が個人を証明し得る道具として機能していた点を明らかにした論考を公表することができた。

(4) その他

村社会のみではなく支配側の印の使用についても視野に入れ、代官江川氏の史料群から江戸の印判師の史料を抽出し、代官役所で購入、使用された印についても検討することができた。ここで確認した印判師は村の百姓が製作を依頼、購入した印判師と同じ者であり、印判師の活動、印の流通のあり方についても検討する手掛かりを得られたと考える。

なお、三都の中では特に江戸の印判師に関する史料を多く集積できたため、江戸の印判師と周辺地域のつながりについては見通しを立てることが可能となった。印を購入する村や百姓の特質についても共通性を見出しているところであるが、引き続き、各事例から地域の特徴を掘り下げての分析が必要となる。大坂・京都の印判師に関する史料については、集積した史料をさらに丹念に分析し、それぞれの印判師の活動および周辺村々の様相についての比較検討を継続して進める予定である。

各地の調査の中で一冊の中に多くの押印がある「印鑑帳」ともいえる帳簿が散見することがわかった。これらの帳簿の内容について詳細な分析を行う必要があると考えている。一方で、三都以外の印判師についてはその明確な存在を確認したとは言い難いため、引き続き、江戸および周辺に流通した印、そして大坂・京都およびその周辺地域に流通した印の分析を基本としながらも、特に東北・四国・九州地域での調査・データ集積を行い、地域独自の様相を明らかにしていくことが必要である。史料所蔵機関発行の目録等によるデータ収集、古文書調査も継続させつつ、近世社会において、生産・流通・消費の様相を総合的に検討することを通して、日本社会の特質を追究していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 千葉真由美	4. 巻 69
2. 論文標題 江戸の印判師と印の流通 下総国・常陸国の村々の事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 千葉真由美	4. 巻 884
2. 論文標題 近世の百姓と印	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------